

ホタテガイ耳づり養殖試験—III (耳づり作業時期とホタテガイの生残率 その1)

田中 俊輔・青山 禎夫

はじめに

ホタテガイの耳づり作業は、採苗翌年の2月中旬から4月中旬に実施するように指導している(「ホタテガイ耳づり養殖の心得、青森県56年2月」)。しかし、2~3月は作業環境条件が悪いので、気候が良くなる6~7月に作業を行い、新貝出荷前の翌年4~6月に販売することを考えて本試験を実施した。

材料と方法

1. 試験期間：昭和56年6月30日~昭和57年5月4日
2. 調査項目：通常の耳づり作業時期より遅く作業を行った場合の生き残り状況
3. 試験漁場：青森市久栗坂実験漁場
4. 耳づり試験施設：同漁場で実施しているモニター養殖試験施設の一部を使った。
5. 供試ホタテガイ：センターが川内実験漁場でモニター養殖試験中の55年産ホタテガイで、養殖経歴は、稚貝採取 100 個/パ (8月10~11日)→第1回分散 20 個/パ (9月29~30日)で、第1表に供試ホタテガイの測定結果を示す。

第1表

	殻 長 (mm)	全 重 量 (g)	生 残 率 (個、%)	生貝中の 異常貝 出現率 (%)	$\frac{\text{個/吊} \times \text{連} \times \text{個/丸} \times \text{段} \times \text{連}}{\text{約個/パ} \times \text{段} \times \text{連}} \times 100 = \text{利用率}$ (%)
センター	69.86±4.04	38.58±5.38	99.0(204)	0(202)	$\frac{100 \times 20 + 10 \times 10 \times 2}{\text{約} 20 \times 10 \times 12} \times 100 = 91.7$

6. 方法：耳づり養殖は、ラックスロープ(長さ10m、直径6mm)の上端1.5mをテンボーとし、その下の7.5m部分に15cm間隔になるように1ヶ所2個ずつホタテガイを固定した。耳づり養殖と比較するために丸籠にも10個/段になるように収容して同時に垂下した。

ま と め

垂下したホタテガイの中間測定を11月6日に行い、57年5月6日に取り揚げた。取り揚げ時の結果を第2表に示す。

第2表

	調査年月日	耳づり時の 殻 長 (mm)	殻 長 (mm)	全 重 量 (g)	測定 個数 (個)	異常貝 出現率 (%)	1) 生残率 (%)	2) 生残率 (%)	付着 物 (g/連)
セン ター	56年11月6日	70.35±6.45	84.07±5.80	76.34±14.70	43	14.0(50)			644
	56年11月6日 3)	70.03±4.54	84.83±6.08	81.89±13.68	46	23.3(60)			716
	57年5月6日	—	111.23±5.41	168.92±21.11	27	10.0(30)	43.0	16.0	

- 1) 耳づり養殖 2) 丸籠養殖
3) へい死個体66個体中異常貝出現率は69.1%、平均殻長(正・異混み) 81.99 ± 6.90 mm)

通常行われている耳づり作業時期より2～3ヶ月遅い6月30日に耳づり作業を行って垂下したホタテガイの取り揚げ時の生残率は43.0%で、へい死個体の69.1%が異常貝であった。また、丸籠に収容したホタテガイの生残率は、16.0%と低かった。

一方、3月20日に川内町実験漁場に垂下した同経歴のホタテガイは、取り揚げ時の生残率が83.3%(落下個体を除くと97.5%)で異常貝は観察されなかった。

両実験漁場の養殖施設は、センターで作製後設置したもので施設の構造や、また、養殖管理方法にも差がないことから、耳づり作業を約3ヶ月遅くしたことがホタテガイに何らかの影響を与えたものと思われた。耳づり作業時間の問題については再度検討したい。

参 考 文 献

- 1) 三戸他(1983)：ホタテガイ耳づり養殖試験-II 本誌 第12号